

アートセラピーの全国実態調査 (1)

—— 調査結果の概要と分析 ——

○神戸医療福祉大学 兼子 一
 甲南大学人間科学研究所 石原みどり
 (特活) ライフスキル研究所 小村 みち

1 目的

本報告では、2013 (平成25) 年に実施したアンケート調査のデータに基づいて現代日本におけるアートセラピー (以下 A T と略記) とその諸活動の実態を明らかにする。それ以前に実施したパイロット調査から得られた仮説は大きく 3 点あった。①保健・医療領域のプロパーが不信の目で見られる市井の A T は、素人に毛が生えた未熟で危うい存在であるかもしれない。②未熟な場合であっても、何らかの支援をすれば地域社会に貢献できる有用な人材に育つ可能性がある。③治療行為が本来不可能な市井の A T は、持続可能な経営をするため、むしろ病圏の人を対象にしたプロパーの A T と距離を置きたがっているのではないのか、というものであった。この仮説から市井のアートセラピストを対象に全国規模の実態調査を行った。ここでは、アンケートのデータを軸に、セラピストの属性、活動の実態、医療・保健・福祉・教育などの諸領域との関連性、地域社会での位置づけ、地域の芸術活動との関係などについて解説する。

2 方法

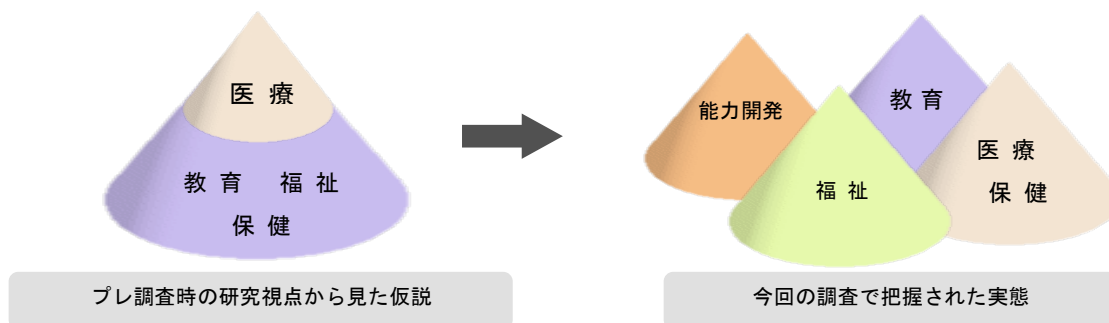
甲南大学人間科学研究所において 2008 (平成 20) 年～2011 (平成 23) 年にプロパーを対象に実施した調査 (300 票配布, n=127, 回収率 42.3%) のデータ分析結果 (川田・西, 2012) から仮説を構成し、調査票を作り直した。2013 (平成 25 年) 4 月～5 月に「アートセラピー全国実態調査」としてアンケート調査を実施。アンケート対象者の選定は、ウェブサイトにも営業情報等を掲載しているアートセラピストを日本全国で検索して 946 名を抽出。抽出した該当者全員に郵送法で調査票を配布・回収している。宛先不明などで返送されてきた無効票を除くと 868 件への送付となり、そこから有効回答数は 237 件 (N=868, n=237, 回収率 27.3%) となった。

また、この中からインタビュー・参与観察への協力を申し出てくれたインフォーマントは 124 名。全国を 10 エリア (北海道・東北・北陸・関東・東海・関西・中国・四国・九州・沖縄) に分けて、実施セラピーの特徴を吟味し、内容が重複せず多様性が把握できること、質の高い実践をしていると推測できることを目安に有意抽出し、現在 22 件の質的調査を実施した (2014 年 6 月時点)。

3 結果・結論

当初の仮説とは異なり、市井のアートセラピーは、保健・福祉・教育・能力開発 (自己啓発を含む) などの領域で内発的かつ自律的に発展している。それは、キュア (治療) な活動というよりは、人間のストレングス (潜在化した生活力・生命力) を引き出すエンパワーメントに分類できるものである。しかし、このエンパワーメントは古典的な社会的弱者の権利回復運動ではなく、むしろロハス (LOHAS) 的な生き方と消費行動に結びついた柔らかなものである。

アートセラピーの活動領域と関係性



【文献】

川田都樹子・西欣也編, 2012, 『調査報告書「アートセラピーの現状と課題——アンケートとインタビューから」』甲南大学人間科学研究所 (芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究) 2012 年 2 月。

※ 本報告は、JSPS 科研費・挑戦的萌芽研究 24653153「アートセラピーの全国実態調査」(2012-2014 年度、研究代表者：兼子 一) の研究成果の一部である。